

# 日本発達障害学会第 60 回研究大会報告

村中 智彦  
(新潟大学大学院教育実践学研究科)

## 【学会紹介】

現在では一般社団法人となった「日本発達障害学会 The Japanese Association for the Study of Developmental Disabilities (JASDD)」は、60 年前に設立されました。関連する特別支援教育関係の中でも、歴史の古い学会です。知的障害者や発達障害者を主な対象として、各分野領域の科学研究を推進、援助するとともに、各国の研究活動と連携を保ち、発達障害研究の発展と問題の解決を図ることを目的としています。

主な活動として、年 1 回の研究大会を開催し、機関誌「発達障害研究」を刊行しています(年 4 冊)。2023 年 1 月より、新たに英文誌 Journal of Developmental Disabilities Research [JDDR] がオンラインジャーナルとして発行しています

(<https://www.jasdd.org/jddr-en/>)。60 年前の設立当初より「国際知的・発達障害学会 International Association for the Scientific Study of Intellectual and Developmental Disabilities(IASSIDD)」の構成団体として理事会に役員を派遣し、現在も日本学術会議第一部に加盟しています。また、公益社団法人日本発達障害連盟諸事業への協力参加を行っています。

本学会の特徴や強みは、関連学会と比較しても、教育・福祉・医療・労働等の多岐に渡る分野領域、幅広い臨床実践のフィールドに従事する正会員、学生会員、団体会員から構成されていることです。正会員が普段従事しているフィールドは実に多様で、著者は 3 年前から学会の理事を務めているのですが、理事の中にも、児童精神科や小児神経科等の医学者、physician-scientist、福祉・労働機関の従事者が多く含まれ、他学会には見られない強みといえます。こうした多様性に富んだ会員構成は、対象者と家族への有益な支援を実行し、社会参加とウェルビーイングを高めていくためには、関係機関、支援者間の連携協働による支援が不可欠であることを物語っています。関係者が一体となって、彼らの乳幼児期から学齢期、学校卒業後の成人・老年期までの長期的、持続的な視点に立ち、各ライフステージで最適な支援を行い、支援体制を整備することの重要性を示唆しています。要は、みんなで彼らと家族の生活を支えることに力を注ぐ学術団体です。著者も、この点に魅力を感じ、学会活動を続けています。

## 【大会概要】

大会の 2 年前、本年度の第 60 回大会の実行委員長をお引き受けすることになり、少しずつ準備を進めてきました。大会当日は、2025 年 11 月 1 日(土)～11 月 2 日(日)の 2 日間、新潟大学五十嵐キャンパス教育学部講義棟を会場に、対面で開催されました。コロナ禍に伴うオンライン中心の大会を経て、近年では全て対面による研究交流が行われています。教職大学院に在籍する院生 3 名(賀田祐介、小川 彩、澤田哲寛)と教員 3 名(野住明美、佐藤大介、八藤後和男)が準備委員として大会準備、運営を支えました。参加者から、「大学前駅が大学前でない、正門から教育学部棟まで遠すぎて・・・」とい

うご意見(苦情?)も頂きましたが、当日天候は、11 月初旬にしては温かく、雨も少なくなんとか持ちこたえたところでした。

大会テーマは「知的障害・発達障害者の学習・行動・生活支援の到達点と新たな一歩」でした。特別講演には、東京大学先端科学技術研究センターの熊谷晋一郎教授を招聘し、そのほか 2 つの実行委員会企画シンポジウム、6 つの最新研究セミナー(教育講演)を企画しました。本大会は 60 回を迎え、アニバーサリーとなり、学会企画の記念シンポジウムも企画されました。また、本学会は一般社団法人「学校心理士会」の社員学会にもなり、例年、学会企画シンポジウムは士会 A 研修単位認定の承認を得て開催されます。ポスター発表 123 題、自主シンポジウム 12 題、そのほか書籍展示は 9 社でした。申込合計数は 527 名、当日の来場者数は約 490 名でした。昨年の第 59 回大会國學院大學に引き続き、全てのプログラムが対面で実施されました。会場では参加者同士の活発な研究交流が行われ、地方開催を考慮しても盛況となりましたこと、ご参加頂きました全ての正会員、県内外の非会員、学生会員の皆様に心より感謝申し上げます。

大会運営は、実行委員長と事務局長の池田吉史(東京学芸大学)、実行委員 27 名、そして運営事務局の株式会社コムラとともに進めました。大会年度の 4 月、委員長と事務局長の関係者で、主に現職教員の委員で構成される準備委員会を設立しました。また、実行委員長の関係する「新潟県」「新潟市」「三条市」「長岡市」「柏崎市」「上越市」「十日町市」の各教育委員会、「新潟県発達障がい者支援センター RISE」「株式会社井手塾こども未来事業部また明日」よりご後援を頂きました。

## 【大会テーマ】

知的障害や発達障害者の示す困難は、学習、認知、行動、社会性、運動等と多岐に渡り、併存や合併も多く、幅広い状態像が見られます。支援の場も家庭、園、学校、施設、医療や労働機関と広くなります。障害の重症度や支援ニーズに応じて、有意義な活動への参加と生活改善に向けた包括的で段階的なアプローチが必要でしょう。先にも述べましたが、本学会の特徴や強みは、多様なフィールドに従事する会員で構成されていることです。多様なニーズのある会員一人ひとりが、障害の社会生態学的モデルに基づき、対象者と家族にとって有益な支援を実行し、社会参加とウェルビーイングを高めること、そのために支援者同士でどのように連携協働していけばよいかを命題となります。関係者が一体となり、乳幼児期から成人・老年期までの長期的な視座に立ち、それぞれのライフステージで生じる課題の解決を図り、最適な支援や体制整備を見つけることが目標となります。本大会では、知的障害・発達障害のある本人と家族を支える実証研究、臨床や実践はどのようにあるべきかを再考し、彼らの学習・行動・生活を豊かにするための研究成果と課題を踏まえて、支援者個々が、また協働連携して次のステ

ップに向けてどのような一歩が踏み出せるかを議論する場となりました。

### 【企画内容・運営協力者】

今大会の企画内容・運営協力者は下記のとおりです。

#### (1) 特別講演

「当事者研究をはじめよう、到達点と新たな一歩—発達障害、依存症研究より—」 熊谷晋一郎（東京大学先端科学技術研究センター）

#### (2) 学会企画シンポジウム

①「知的障害・発達障害者への支援の到達点—教育・福祉・医療連携の新たな一歩—」 企画：神尾陽子（お茶の水女子大学・神尾陽子クリニック）、村中智彦（新潟大学）

話題提供：橋本創一（東京学芸大学）、小澤温（筑波大学）、小谷裕実（京都教育大学）

指定討論：小島道生（筑波大学）、宮本信也（筑波総合クリニック）

②「知的障害・自閉症者の強度行動障害への支援の到達点—豊かな成人期・高齢期の暮らし—」 企画：神尾陽子、村中智彦

話題提供：日詰正文（のぞみの園）、井上雅彦（鳥取大学）、曾根直樹（日本社会事業大学）

指定討論：野村政子（東都大学）、神尾陽子

#### (3) 実行委員会企画シンポジウム

①「特別支援学校における重度知的障害児の行動問題へのチーム支援—仲間同士のやり取りを中心に—」 企画：宮田賢吾（高知大学）、村中智彦

話題提供：末永統（作新学院大学）、滝澤健（香川県立香川中部支援学校）、宮田賢吾

指定討論：霜田浩信（群馬大学）、井上雅彦

②「知的障害児の学習・行動・生活に対する認知的アプローチ」 企画：池田吉史（東京学芸大学）

話題提供：葉石光一（埼玉大学）、平田正吾（東京学芸大学）、渡邊雅俊（國學院大學）

指定討論：野口和人（東北大学）

#### (4) 最新研究セミナー（教育講演）

①宮本信也 「DSM-5-TR と ICD-11 における神経発達症」

②岩本佳世（愛知教育大学）「通常学級での集団随伴性をういた学習支援と個別支援」

③丹治敬之（筑波大学）「発達障害のある子どもの学習支援とデジタル教材」

④神尾陽子 「ASD 児の早期療育のアウトカムをどのように捉えるべきか—ニューロダイバーシティの観点からの再考から—」

⑤窪島務（滋賀大学名誉教授・NPO 法人 SKC キッズカレッジ）「インクルーシブ教育の課題としての「スローラーナー」（境界知能）問題」

⑥北洋輔（慶應義塾大学）「限局性学習症の早期発見と発達予後」

### 【研究科の院生、修了生、教員のポスター発表】

本研究科の院生、修了生、教員（下線部）が行ったポスター発表の発表者及びテーマは、下記のとおりです（ABC 順）。

賀田祐介・野住明美・酒井武志・佐藤大介・村中智彦 「小学校授業におけるビジョンスライドによる児童の見やすさの促進」

本間伸吾・酒井武志・村中智彦 「学校規模ポジテ

ィブ行動支援に基づく児童の望ましい行動の促進—教職員の協力体制を中心に—」

伊藤宏之・野住明美・村中智彦 「特別支援学校高等部における進路選択・決定及び就労継続に及ぼす要因」

宮田賢吾・村中智彦・岡村章司 「重度知的障害生徒の行動問題への協働的支援における教師の関与変化—支援会議の発言内容の分析—」

野住明美・村中智彦 「小中高等学校管理職と中堅教員の特別支援教育に関する知識と関連要因」

小川彩・佐藤大介・村中智彦 「高等特別支援学校における校内研修による教員の専門性向上—中堅教員対象の語り合いカフェの試行—」

手塚公志朗・宮田賢吾・村中智彦 「知的障害特別支援学校における自立活動の指導—時間と学校教育活動全体の指導の機能的な併用—」

澤田哲寛・佐藤大介・村中智彦 「特別支援学校のチーム支援による重度知的障害生徒の活動参加の促進と座り込み行動の低減」

このうち、修了生の本間伸吾さんの発表「学校規模ポジティブ行動支援に基づく児童の望ましい行動の促進—教職員の協力体制を中心に—」は、なんと優秀発表賞に選ばれました。たいへん名誉なことです。ちなみに著者は30年以上に渡り学会発表を続けていますが、一度も選ばれたことはありません。

### 【大会を終えて】

事務局長と二人三脚で運営を進めて参りました。大会2年前、学会より打診された際、「そんな大役、大丈夫なのか」の不安と、「役割なのかな」と楽観的に受け止めていました。大会が刻々と近づき、自身の転出も重なり、お引き受けしたことを一度だけ後悔しました。当日は大会風景の撮影を失念するほどの2日間で、危うい運営でしたが、大きなトラブルがなく盛況に終了できましたのは、宮本信也理事長をはじめとする役員の方、前大会実行委員長の小谷裕実先生（京都教育大学）、高橋幸子先生（國學院大學）のお力添えのおかげです。研究科で支えてくれた院生、修了生、教員、また、県内外から駆けつけてくれた準備委員の皆様へ感謝しています。二度とないであろう経験と数え切れない程の学びを得て、全国の研究者や実践家と交流できました。大会運営をお引き受けして本当に良かったと思います。

来年度の第61回大会は、2026年11月14～15日、公立大学法人長野大学において、「ライフステージを通じた切れ目のない支援の実現のために」のテーマで開催されます。本報告を含めて、関心のある方は、ぜひ大会にご参加頂けますよう。学会というのは、県内、さらに国内外の研究者や実践家と研究交流できる研修、研鑽の機会です。ともに学びを高めていきましょう。

### 【附記】

日本発達障害学会 HP <https://www.jasdd.org/>

なお、本稿は「発達障害研究」48巻1号（2026年5月末発行予定）の「日本発達障害学会第60回研究大会報告」（村中智彦）を大幅に加筆修正したものである。